

シンボルスカ生誕百年の深い感慨と感謝 長屋のり子



シンボルスカ生誕百年(1923-2012)の活字が詩誌に静かに刻まれている。生誕百年の詩人達、敬愛やまない加島祥造(1923-2015)、田村隆一(1923-98)、北村太郎(1922-92)の「荒地」のメンバー、そして牧羊子(1923-2000)も並んでいて、やるせない感傷が胸奥を走った。自分と彼等の年齢の違いのあまりないことにもあらためて驚嘆する。

ポーランドでは十年前と同じように、あのロングランを続けたシンボルスカ回顧展が古都クラクフの国立美術館でひっそりと開催されたのだろうか？ その展覧会の追想を『シンボルスカの引き出し』(2017)の中でつかだみちこさんがこう書いている。——その昔、最後の恋人、作家のコルネル・フィリポヴィチと早朝からどこか地方の蚤の市に出掛けて集めたキッチン骨董品や、美しいアクセサリー、ヴェネチアンガラスの箱、ガラスの集積が縦長のガラスケースの中に積みあげられ燦然と光を放っている。復活祭やクリスマスなど人々の集まりの日に自ら「あみだくじ」を作り、それらを惜しげなく親しい人々にプレゼントしつづけた——私はこの逸話が愛しくてならない。

シンボルスカの代表作「可能性」の中の二十項目ほどの好きなものを並べあげた最後に、そのまさに「引き出しが好き」というフレーズがある。私の愛してやまない詩だ。引き出しの奥には可能性が眠っている。ドストエフスキーよりディケンズを好む。人類を愛する私より人間好きな自分が好き——彼女の詩の此処其処に相似型の私が潜んでいる。その古い荘重な家具の引き出しを掴みだすシンボルスカの繊細優雅な指先が鮮明に眼前に浮かぶ。少し逸脱するが、この列挙法とでも呼ぼうか、その描き方は独自のもので、語句の選択に関しては緻密で、意識的に実験的である。「奇蹟の青空市」「覚え書き」「統計の説明」「一覧表」等(列挙)秀逸詩群、枚挙にいとまない。

日本詩壇では、重鎮支倉隆子(1940-)詩に昨今、この列挙詩法を多く散見する。支倉詩はさらに大胆に痛快に無作為にそれを駆使して鮮やかだ。

支倉隆子を引き合いに出したからには、『倚りかからず』『わたしが一番きれいだったとき』の日本のシンボルスカと呼ばれる茨木のり子(1926-2006)もあげざるまい。詩の核に唯物論ともいふべき自分の思考方法を終生貫いて揺るがなかったという魂の強靱さも全き共通項、そして、ヨーロッパ詩

壇のグレタ・ガルボと称されたその凜然の美貌は茨木のり子にあって毅然、比肩する。詩に屈強無比な精神性を潜めるといふ点でも確かに類似してといえるかもしれない。その諧謔、そしてシニカル！

支倉、茨木、シンボルスカの詩の醸し出す芳香は、一般的な香水のそれではなく、針葉樹の傷みの中から醸成される樹液、バルサムのそれだ。奔放でいて、しっかりと重力を持つ発想。その引力の強靱。生誕100年のシンボルスカ、97年の茨木のり子、支倉隆子冴々と現役83年の詩人達があらためて眩しい。親しい慕わしい眩暈が私にやってくる。シンボルスカは「一覧表」の中でこんな風に問う。



何が本当だったのか／かろうじて本当のように見えていたのは何だったのか／星の世界の、そして星の下の／入場券の他に退場券も必要な／この劇場の観客席で。〈…〉どうして私は悪いことを／いいことと取り違えたのか／間違いを繰り返さないためには／何が必要なのか。

これらの詩行こそは私の胸の中の疑問符と寸分違わない。まさに私の逡巡だ。この読者との深い共時性こそが、卓越の詩人達の変らないインパクトだ。アイロニカルでいながら優しく透徹した詩人の、このひらける見晴しのよさに、私達はぐいぐいとものごとの深い意味へと導かれていく。——私のとても好きな詩「とてもふしぎな三つのことば」では、

「未来」と言う／それはもう過去になっている。／「静けさ」と言う／静けさを壊してしまふ。／「無」と言う／無に収まらない何かをわたしは作り出す。

このシンボルスカの美しい逆説。完璧な成熟。その生誕百年に嬉々として瞑目。(ながや・のりこ)



ドキュメンタリー映画上映『Ainu ひと』 監督からの報告&館長の講演 2024.5~6月頃

テーマ「プロニスワフ・ピウスツキのいま～ポーランド、英国におけるアイヌ文化への関心」

- 〈ビデオレター〉溝口尚美監督「ワルシャワ上映会の報告」
- ドキュメンタリー映画『Ainu ひと』上映
- 〈対面による講演〉「ジャパン・ハウス ロンドンにおけるアイヌ文化展」

長田佳宏(平取町立二風谷アイヌ文化博物館館長)